幸せのかたちを未来へ

代田中・１　臼井　遥音

「あなたの大切な一曲を教えてください。」
そう聞かれて、思い浮かぶ曲はあるだろうか。
例えば、それは元気や勇気の源だったり、緊張をほぐしてくれる薬のようであったり、
あるいは、懐かしい思い出や大切な人の存在が浮かぶものであったりするかもしれない。誰しもがそんな一曲を心にもっているように思う。そして、音楽はときに想像以上に人の心に響き、心を豊かにし、幸せをもたらすことを、私は知ったのだ。

ちょうど一年前の夏だった。バイオリン教室の仲間四人と介護福祉施設で演奏を行うことになった。祖父母ほどの年齢の皆さんが好む曲は何だろうと、資料を集めて選曲をし、プログラムを作った。普段、違う学校に通い、学年もさまざまな私たちが共通して思うことは、自分たちの演奏で誰かに喜んでもらいたいということだった。練習を重ねた本番で、私たちは想像を遥かに超えた反応に驚いてしまった。演奏中、涙を流している方があちこちに見られたのだ。温かい拍手が鳴りやまず、ありがとうと握手を求められる場面もあった。こんなにもうれしい反応が返ってきたことは驚きでしかなかった。私たちは自然と笑顔になり、演奏は穏やかなテンポで進み、音色が温かみのあるものにかわっていくのが分かった。音程は絶対に外さず、楽譜をよく見て正確に。合奏はぴったりと合わせること、と注意深く練習してきた私たちにとって、なんとも新鮮で、まるで新しい世界が目の前に広がっていくようだった。そして、その感覚にすっかり感動してしまった自分たちがいた。演奏後に、認知症を患う方のご家族が、

「言葉を忘れてしまった母が、童謡を聴いて歌うような仕草をして、体を揺らして笑ったの。」
と喜びを伝えてくださった。
その言葉を聞き、私たちの演奏には、まだまだできることがたくさんあると確信した。そして、そんなふうに誰かを幸せにできることをもっとしてみたくなった。

メンバーはみんな同じことを考えていた。
私たちは、これをきっかけに演奏活動をするボランティアグループを作った。全員の名前から一文字ずつ取ってつけた団体名は、メンバーの一人が長く仲良く続けられるようにと考えてくれたものだ。一人でも多くの方に幸せを届けられたらいいねと約束し、活動が始まった。その後、たくさんの方々の応援を受けて、私たちはあちこちから声をかけていただけるようになった。そして、季節に合わせて新曲を増やし、衣装も変えた。
「夕焼け空を思い浮かべて、一緒に歌ってください。」と言って始める曲や「故郷の景色を思い出して聴いてください。」とお願いする曲は、毎回アンコールをもらう人気曲になった。皆さんがそれぞれ、曲の世界へ入り込むように聴いてくださるのが分かってうれしかった。訪問回数が増えるにつれて、私は、皆さんが好む曲と、その曲にまつわるエピソードを聞くのが楽しみになった。
「泣きやまない弟の手を引いて、山から下りてくるときに歌ってあげた曲だ。」
「母親の帰りを待って、とんぼを追いかけた夕焼け空が本当にきれいで、今でもこの曲を聴くと思い出す。」
「亡くなった妻がよく聴いていた大切な曲で、まだ涙が出るんだ。」
と教えてくれた方もいた。私は、まるで皆さんと一緒にタイムスリップして、昔の時代を旅するような感覚になり、宝物を見せてもらっているような幸せな気持ちになった。

あるときは、保育園に呼ばれて演奏会をした。この年頃の子のことは私たちもよく知っている。任せてと言わんばかりに選曲にも力が入る。子供たちは笑顔があふれていて、きらきらとした目でこちらを見つめていた。

「発表会で練習したからうまく歌えるよ。」

「ママが教えてくれたんだよ。」

「先週産まれた妹に、毎日歌ってあげるお歌だよ。」

という子までいた。それぞれ思い入れのある曲を一生懸命教えてくれて、本当ににぎやかだった。こんなに小さくても、自分の特別な一曲があるのだなと知ってうれしくなった。隣では先生が、

「去年苦労したけど大成功した卒園式の一曲で、泣いちゃいました。」

と目を赤くしていた。ここにもまた、一曲に物語があった。帰り際、

「お姉ちゃんみたいになりたい。どうしたらそんなにうまく弾けるの。」

と年長さんの女の子が聞いてくれた。その言葉は、これまで受けてきたどのコンクールの賞よりもずっとうれしく、私には価値のあるものだと感じた。十年後のこの子たちの姿を先生方と一緒に見てみたいなと、今度は未来に旅してみたくなっていた。

考えてみると、私は演奏を終えて帰ってくるたびに幸せな気持ちになっている。誰かのためにとか、喜んでもらえたらうれしいといって始めたはずだった。けれども、今確かに私は出会った皆さんから幸せを受け取っているのだ。ここでは幸せが循環していることに気づき、はっとした。知らず知らずのうちに、私たちは、新しい出会いや、相手を思って準備をする過程を通して、自分たちも成長をしながら、新しい世界を理解したり、視野を広げたりしていたのだ。そして、渡したはずの幸せを、もっと大きくして返してもらっていたのかもしれない。演奏を通して、多世代と交流ができ、絆をもって互いの心を豊かにできたことはとてもうれしいことだと思う。本当にこんな形になるとは想像もしていなかったけれど、誰かを思って行動することは、結局、誰かから大切に思ってもらえて、幸せが行き来することにつながるのだと教えられた。私たちができることは、仲間と演奏することだった。誰かの大切な曲を、心を込めて演奏することから始まった。もちろん、音楽自体にも力はあるけれど、あたたかい心で気持ちをこめて表現したことで、相手の心も動き始めたのだと思う。

それぞれの人に、それぞれのできることがある。そして、あなたにしかできないことを待っている人がきっとどこかにいると思う。そういった一人一人のできること、第一歩が、社会を変えていくのかもしれない。

私は、私のできることとして、これからも演奏を続けていきたい。ボランティア活動で出会った全ての曲が私の大切な一曲だ。私に新しい世界を見せてくれて、自信と感動を与えてくれたこの曲たちは、おそらく私の未来でも美しい旋律を奏でて、私自身を勇気づけてくれるだろう。だからこそ、今週末もこの言葉から始めるつもりだ。

「あなたの大切な一曲を教えてください。」

心を込めて演奏したい。いつかこの町にも幸せの輪が広がっていくことを願って伝えよう。

大切な真っ白いバイオリンケースを改めて見つめた。十年前、この楽器に出会えた奇跡は、幸せの始まりだったのかもしれない。出会ったたくさんの人に対して、感謝の気持ちを忘れず、私が思う幸せのかたちを大切にして未来へ繋げたい。